

森林生態系教育研究の拠点



長期生態系観測試験地の紅葉

秩父演習林は1916年に設立され、昨年100周年を迎えました。面積は5,812haで、標高530～1,980mの冷温帯から亜高山帯までの原生林を含む広大な森林を有しています。比較的東京から近いですが、東京湾に注ぐ荒川の源流部に位置し、本格的な山と深い溪谷という雄大な自然を味わうことができます。秩父の山々は奥地のように思われますが、かつては峠越えで甲州、信州への交通の要衝であり、山と人の関わりの物語が数多く残されています。1998年に山梨県に抜けるトンネルが開通し交通の便は良くなりましたが、山には今も登山道が縦横に走り、調査も長時間の山歩きが多く小屋泊、テント泊もしばしばです。現在は林内に3路線で総延長3,000m、最長路線では一気に標高差500mを昇ることができるモノレールが整備され、以前よりは便利になっています。

100年の歴史の前半は林業主体で、大学の財政の一端を支える木材収入を上げるため過半を人工林にする計画を立てられ、伐採とその跡地への植林が進められました。木材を運搬する森林軌道は1970年まで運行していて、今も線路の跡が残っています。



軌道による木材運搬



モノレールで調査に出発

後半の50年は次第に森林生態系の教育研究へ移行しました。まず人工林の成長、そして天然林の成立や、様々な生物の生態と相互関係、森林の機能



山全体を覆う新旧の人工造林地

について研究が行われてきました。そのため、様々な森林とその研究成果を学ぶことのできる「森林生態系博物館」としての役割も担っています。近年ではシカなどの野生動物害が大きな問題となっていますが、その影響下での森林の生物相や機能の変化、森林更新、野生動物管理などの課題に対して、野外操作実験による実証試験を進めているところです。秩父演習林では、これからも伝統的な樹木の大きさの測定から、生物多様性のDNA分析、水環境の化学分析、航空機レーザー測量による森林構造の解析などの様々な技術を駆使して、森林の成り立ちに迫っていきます。

附属演習林秩父演習林長
山田 利博 教授